

# 火星

平成二十三年八月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

凌霄花己に倦みて揺れ始む

凌霄の真昼の揺れのあやふかり

凌霄の花に青年引き籠る

葬列の通りし田水沸き出だす

ペティキュアの足海へむけハンモック

正座して寝莫蔭に父の目覚めぬし

涼しさや雄椰雌椰の影踏み

花火屑掃き寄せこともなき盆会

初風や軍鶏の伏せ籠辺りより

星流れけり屋根の上の草の花

# 太白星

柳生千枝子

少年の脇目一瞬とけい草  
林道の雀隠れも長けにけり  
春蟬の一小節に耳洗ふ  
蛇いちごアリスの庭の迷路行き  
春蟬や海への道の空き別荘  
染寺の音なき雨の牡丹かな  
夕光ゲの淡くさし初め白牡丹

杉浦典子

ひとゆるみせし綱山車を廻しけり  
祭笛ひとすぢ山のふもとより

子の追うてゆきしままなり祭笛  
水の面の日をめぐりゆく蛇の丈  
舟虫の走り流紋岩くもる  
石楠花に午後の日ぬくき遠忌かな  
水ぎはに夏鴨のくる忌日かな

浜口高子

ひと跳びの蛙の波が田を走る  
小満の水かげらふの揺らす塔  
箱庭の川の続きの一番星  
夏の月柵崩れゐる薬草園  
鮎焼けば夫の帰つてくるやうな  
折れ竹を滑る芒種の雨雫  
台風裡写真の両師笑み賜ひ

# 火星作品

## 山尾玉藻選

みづうみは埋み残せり百千鳥  
神 戸 深 澤 鱈

椎の花年寄にある濯ぎもの

麦秋の励みてひとりひとりなる

鱈喰うて口拭ひけり麦の秋

負け牛のきて十葉の花ざかり

轉のひとかたまりに移りけり  
明 石 戸 栗 末 廣

郭公の途方に暮るるこゑなりし

仁丹を含めばそこに青蜥蜴

石打ちし鋏に火花や梅雨兆す

蟻の国出口入口がやがやす

ゴールデンウィークみんなに波しぶき  
宝 塚 蘭 定 か ず 子

前山の霽れきし鶉飼仕度かな

人の後ろにくちなはを見て飽かず

客待ちの櫂の並べる朝ぐもり  
牛に声かけて鎖しけり盆の月  
飛火野へ横から入る子供の日  
葉桜の風の日和や父恋し  
くるぶしに風で虫の睡みぬる  
父起てば母も起ちけり青葉木菟  
月見草そよぐ水の辺牛つなぐ  
昼灯す清滝の宿女郎蜘蛛  
更衣して同志社のAランチ  
エジソンの鼻梁にこぼれ椎の花  
南吹く一の鳥居にポン菓子屋  
葉桜や氏を違へてあねいもと  
路の葉の大きく揺るる梅雨入かな  
一匹の蚊を払へずに臨書かな  
川底の影ばかり見ゆ目高かな  
観音へ螢追うて来たりけり  
麦秋や竿のシートツに垂る力

大和郡山城  
孝子

八幡大山  
文子

坂口夫佐子

# 選のあとに

山尾 玉藻

麦秋の励みてひとりひとりなる

深澤 鱧

私は一面に黄熟した麦畑から何故か影絵芝居をイメージする。陰と陽の光が決して溶け合うことなく交錯し主張しあう、眩しく遙々とした世界を思うからであろう。掲句、「励みて」は畑や家内でのさまざまな労働を指すのだろうが、「ひとりひとりなる」の把握が「麦秋」に抱く眩しく遙かな心象を事に具現している。浪漫詩人鱧さんの面目躍如たる一句。同時発表作へ椎の花年寄りにある濯ぎもの、前作とは一転した穏やかで静かな実写にもこころ惹かれる。

囀のひとかたまりに移りけり

戸栗 末廣

それまで一木に集まって盛んに囀っていた小鳥の一団が、突然他の木に移って再び囀り始めたのであろう。「ひとかたまりに移りけり」は、春先の小鳥の群のいきいきとした動きを捉えて実感がある。一羽の鳥の囀の抑揚をとらえたへ囀の高まり終り静まりぬ 虚子と比べ楽しんでみたい。へ仁丹を含めばそこに青蜥蜴の「そこに」がワンクッションとなり、因果的叙法をウイットあるものになっている。

前山の霽れきし鶺鴒飼仕度かな

蘭定かず子

長良川の鶺鴒飼仕度の景ならば「前山」は金華山であろう。長良川間近に位置するこんもりとした金華山は、まるで川面より立ち上がったような山容である。夜の天候を案じていた作者の眼に、雨雲の切れ間からのぞき始めた金華山がとても晴れがましく映ったことだろう。これから繰り広げられる華やかな鶺鴒絵巻を想像し、期待に胸躍らせる作者である。へ人の後ろにくちなはを見て飽かずには、俳人らしい好奇心が窺え知れて大変面白い。

父起てば母も起ちけり青葉木菟

城 孝子

何か用を思いだし不意に立ち上がった父の動きにつられたかのように、母までもがすつと立ち上がった一瞬の景である。作者はその母の挙動に、父との阿吽の呼吸で父を離れぬ影のような存在となった母に、少なからずこころ動かされたのである。一概に古いタイプの夫婦像とは言い切れまい。年季の入った夫婦が醸しだすえも言われぬ味わいを言外に描いた一句である。

露の葉の大きく揺るる梅雨入かな

坂口夫佐子

風に応える「露の葉」を見て、今日が入梅の日であることに気付いた作者であろう。或いは、実際に梅雨に入った実感を覚えていると解しても良いだろう。露の葉の大きな揺れが、これから続く梅雨の長さや倦怠をそれとなく語っているように、作者のこの感応に納得する。(以下略)



# 恒星圈

渡辺数子

漆黒の牛の胴撫づ薄暑光  
旅靴置きぬ蜜柑の花明り  
母の日をみかんの里に目覚めけり  
足裏にかなふスリッパ新樹の夜  
大和路の寺から寺へ茄子咲けり

飯塚 糸子

渡邊 美保

本丸に風筋ありぬ花は葉に  
薄明の湯気たちのぼる豆ごはん  
世辞一言貰うてうれし花十葉  
すれ違ひの旅にありけり蝸牛  
朝風の青木ヶ原の繁りかな

窮屈な書架の背表紙みどりさす  
はつなつの力いつぱい打つ太鼓  
五平餅の醤油の匂ひ夕薄暑  
柔毛密なる枇杷の実に手を濡らす  
夏に入る樟の大樹に耳当てて

伊勢きみこ

七月号補遺

河崎 尚子

夏めくや淡水真珠腕に巻き  
川床びらき藤のかんざし挿す舞妓  
料亭にすすする鯉濃賀茂祭  
写経終へ牡丹の庭に立ちぬたり  
坪庭に額咲かすなり神具店

杉穂敷く義経道の春の泥  
深吉野の杉間の径の落し角  
しんがりは塗のお籠や花会式  
添へ竹の太き吉野の苗桜  
帽子より花びら零す日暮バス

# 獅子座

山尾玉藻推薦

藤田素子

南風をいなしてなんじやもんじやの花  
衣更へてなんじやもんじやの花の下  
右肩のすこし下がれる更衣  
禅寺の正座の膝のハンカチーフ

川端俊雄

西村節子

牛相撲待てる女のぼんの窪  
春惜しみけり負け牛を撫でもして  
勝ち牛のもどつてゐたる春の鬮  
鬮牛を見て来し札所詣でかな

鶏の土搔いてゐる柿若葉  
初瀬なる筍飯と観音と  
卯の花を覚えて夫の帰りきし  
前垂れの地蔵に我に青時雨

涼野海音

奥田順子

桜散るアトリエにいま誰もぬず  
職安に卯の花腐し聞きゐたり  
皿の上に梅干の種清和なる  
大木の名を尋ねゐる夏越かな

隠国の茶をなみなみと仏生会  
竹の葉の降り降ることも名越かな  
伊吹嶺の裾の瀬音の籐枕  
緑さす重ね売らるる鬼の面

笠置早苗

田中文治

朴の花月の明かりをほしいまま  
新緑の闇の怖しと寝まりけり  
合歓咲いてまぶた優しくなりにけり  
けふひと日枕辺にまで田を植ゑて

朝ぐもり少女のひらくコンパクト  
白鷺の一枝の映ゆる陵の水  
子雀やブルドーザーの音近く  
夕さりの風ゆきわたり白牡丹